

多重対応分析を使用したブルデューの<界>の研究方法における諸問題

構造分析、標本抽出、変数調査、幾何学的データ分析の方法をめぐって

立命館大学大学院社会学研究科後期博士課程 平石貴士

1・目的

この報告の目的は、ブルデューが量的調査の方法として用いてきた「<界>の理論と多重対応分析」の方法のなかで、特に彼が具体的に実行した調査方法を検討することを通じて、ブルデューの<界>の方法論を批判的に検討することである。多重対応分析は量的調査の方法としては我が国ではそれほど重視されてこなかったが、北田(2017)らの『社会にとって趣味とは何か』のなかでブルデューのこの方法論が論じられるなど、これまで検討されてこなかったブルデューの方法論の側面に注目が集まっている。また晩年のブルデューに協力もしていた Le Roux(2014)ら仏の統計学者たちは「幾何学的データ分析」という名のもとに多重対応分析を含め、データ構造を幾何学的に図像化することで分析する新しい方法として位置づけるなど、新しい展開を見せている。ブルデューは多重対応分析を用いた<界>の方法を1970年代以降の主要著作(『ディスタンクシオン』『ホモアカデミクス』『国家貴族』等)で繰り返し用いてきたにも関わらず、これまでその具体的な調査の方法論にまで踏み込んだ検討はされてはこなかった。

磯(2008)の理論研究は、具体的な<界>の調査方法には踏み込んでおらず、他方で、ブルデュー理論と多重対応分析を用いた経験的研究としては、片岡(2001)や近藤(2011)が社会階層研究の文脈で行ってきたが、<界>の方法論については検討していない。報告者(平石 2016)は、多重対応分析を用いた<界>の研究を、日本のポピュラー音楽の界を対象に行った。この界の研究の際にぶつかった問題は、<界>の構成員の標本抽出の問題であった。そこでブルデュー自身が具体的に実行した標本抽出の方法論を、あらためてその論理から検討することが、学説史研究という点からも、社会調査の方法論の検討という点からも必要であるという問題意識に至った。

2・方法

『ディスタンクシオン』『ホモアカデミクス』『国家貴族』といった著作を中心に、あるいは多重対応分析を用いて書かれたいくつかのブルデューの論文も補助的に用いながら、特にそれらの研究の調査方法について書かれた箇所を検討し、ブルデューが実際にどのような標本抽出方法を用いたのか、またその標本に対して、ブルデューはどのような変数を調査したのかについて、作品ごとに比較研究をする。それぞれの調査ごとの標本抽出数やその標本抽出方法の論理、そしてその標本集団に対して、なぜそのような変数が調査されたのかを検討する。

3・結果および結論

『ディスタンクシオン』では上流階級や中流階級の趣味の分布構造を400~500の階級を構成する標本で分析しているブルデューであるが、『ホモアカデミクス』の大学の界の研究では163の大学人の標本、『国家貴族』の大企業経営者研究では213の経営者の標本など、ブルデューは界の研究では70~200程度の標本数を集め、比較的少数であるが、しかし変数については50を越えるような数で大量かつ詳細に調査するという方法を取っている。標本抽出の論理としては、界におけるもっとも権力を保有している行為者を抽出することを目的としており、彼の権力分析と標本抽出の論理は明確に関連していることが明らかになった。

【文献】▲磯直樹,2008,「ブルデューにおける界概念 理論と調査を媒介にして」『ソシオロジ』53(1).▲片岡栄美,2001,『現代文化と社会階層』東京都立大学博士論文. ▲北田暁大編,2017,『社会にとって趣味とは何か』河出書房▲近藤博之,2011,「社会空間の構造と相同性仮説 : 日本のデータによるブルデュー理論の検証」『理論と方法』26(1).▲平石貴士,2016,「日本のポピュラー音楽の界の構造分析—多重対応分析を用いた構造の客観化—」『立命館産業社会論集』52(2).▲Le Roux,2014, *Analyse géométrique des données multidimensionnelles*, Dunod.